

## 聴覚障害幼児のやりとりする力を育てる取り組み

～食育の実践を通して～

土手 信

聴覚障害幼児は、身近な人との関わりの中でやりとりをしながら気持ちや言葉を育んでいく。そのやりとりは、設定された活動の中だけではなく、子どもの生活全般で行われる。食べる場面も、友だちや教師と一緒に楽しく食べる中で、様々なやりとりの話題が生まれるよい機会となる。今年度、4歳児学級において、お弁当や行事食、さらには今年度始まった週1回の給食などを通して、様々な食べ物の効用等について、自作の絵を使用して子どもにとってわかりやすく楽しめるように話をしてきた。その中で、食べたことがない食べ物にも興味をもって食べてみたり、子ども同士が楽しくやりとりしたりする様子が見られるようになってきた。本稿では、具体的な実践の内容や子どもの変容について報告する。

キー・ワード：やりとり 食育 行事食 給食

### 1 はじめに

食育は、生きる上での基本であって、知育・徳育・体育の基礎となるものであり、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実現することができる人間を育てることである（農林水産省，2023）。聴覚障害幼児においても食育は必要なことである。

聴覚障害幼児は、身近な人との関わりの中でやりとりをしながら気持ちや言葉を育んでいく。食べる場面も、友だちや教師と一緒に楽しく食べる中で、料理や食材、調理法、食べ方、好き嫌い、効用等について、興味や知識が広がり、様々なやりとりの話題が生まれるよい機会となる。

本稿では、4歳児学級における具体的な取り組みについて報告する。

### 2 実際の取り組み

#### (1) 導入の経緯

年度当初、本学級の子どもは、食べ慣れないものはほとんど口にしがらなかった。そこで、子どもが食べ物の効用等について興味をもち、食べることに前向きな気持ちになれるように、自作の絵を使用して行事食や給食の紹介をしてきた。

#### (2) 行事食の紹介

5月初旬、子どもの日の行事食として、学級でかしわ餅を食べた。

前日に、かしわ餅を食べる意味について、自作の絵を見せながら子どもに話をした (Fig. 1)。子どもに伝わるように、単純でわかりやすい絵で表すように配慮した。

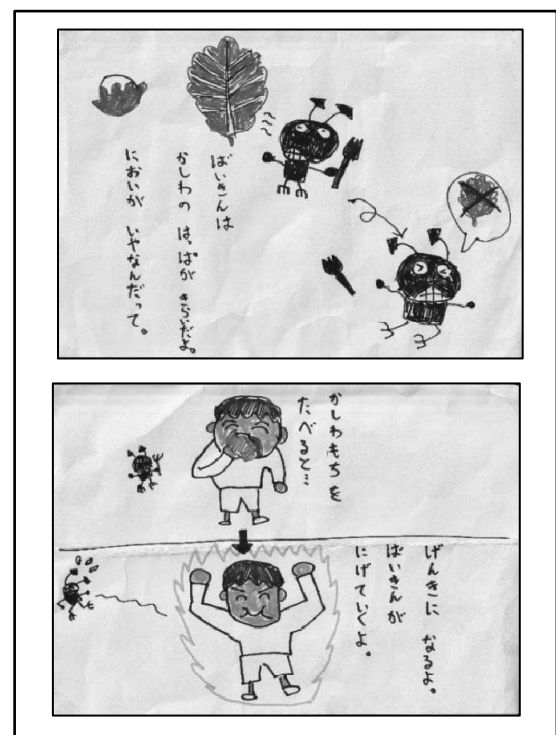


Fig. 1 かしわ餅の紹介

当日、教室でかしわ餅を見せると、黒板に貼っておいた先述の絵を指さし、「食べて元気になる」と言葉や身振りで表してくる子どもがいた。「ちょっと食べてみる」と話す子どももいた。実際に食べ始めると、昨年度は全く食べなかった子どもも、一口食べてみたり、完食したりする姿がみられた。食べながら、手をばい菌に見立てて友達に近づけ、友達がかしわ餅を口に入れるのを見計らって逃げるように遠ざけるなど、子ども同士でやりとりを楽しむ様子もみられていた (Fig. 2)。かしわ餅についての話は全員にとって共通の知識となっており、それを土台にやりとりを楽しむことができたと考えられた。

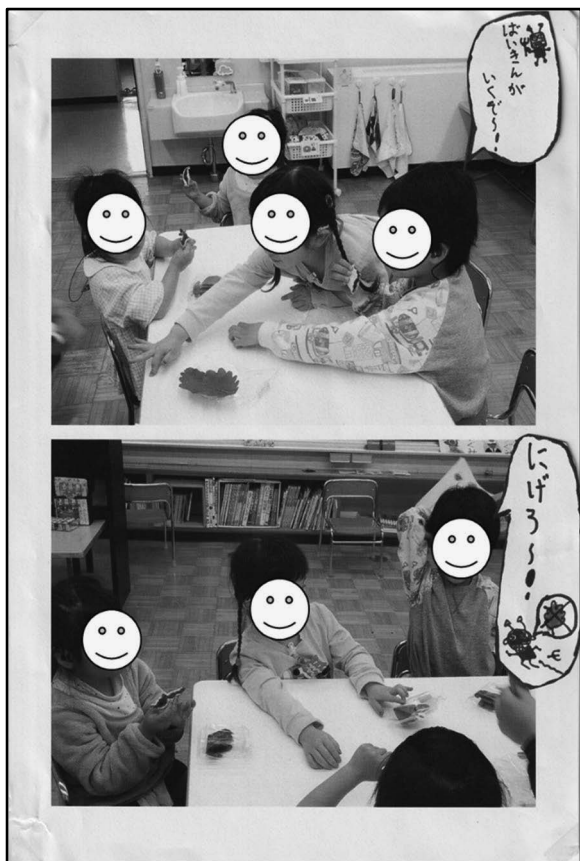


Fig. 2 かしわ餅を食べる子どもの様子

### (3) 給食の紹介

今年度幼稚園で始まった週に一度の給食の機会を生かし、行事食と同様に、様々な食材を食べる意味について、自作の絵を見せながら毎週子どもに話をしてきた。以下に一部の具体例を挙げる。

#### ① 五穀米

Fig. 3 は今年度初回の給食で、五穀米を紹介したものである。給食が始まり、今までは食べなかったおかずも多く出てくる中で、主食までもが食べ慣れない五穀米ということで、保護者から「何も食べられないのではないか」と心配の声も上がっていた。そこで、子どもが前向きに食べられるように話をしていこうと考えたことが、絵による給食の紹介を始めたきっかけであった。

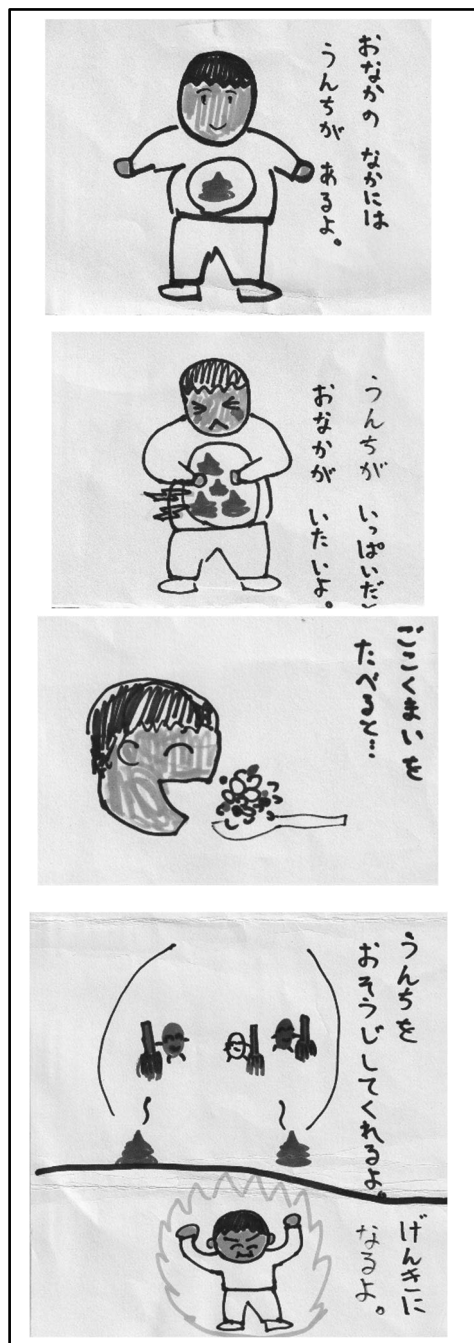


Fig. 3 五穀米の紹介

実際に食べ始めると、どの子どもも五穀米を食べることができた。全部食べきる子どももあり、そうでない子どもも半分以上は食べていた。五穀米を食べながら、「食べたから、うんちがいなくなる」と身振りで表す子どもや、「自分も食べたよ。うんちがきれいになるよ」と言葉で話す子どももいた。

## ② ブロッコリー

Fig. 4は、ブロッコリーを紹介したものである。本学級には当時すぐに「疲れた」と口にする子どもが多く、またおぼけを面白い子どもも多かったので、子どもの実態に合わせ、「つかれたおぼけ」というキャラクターを教師が創作した。食すると「つかれたおぼけ」が逃げていって元気になるという話は、子どもが面白がり、ブロッコリーに前向きな印象をもつであろうと期待した。

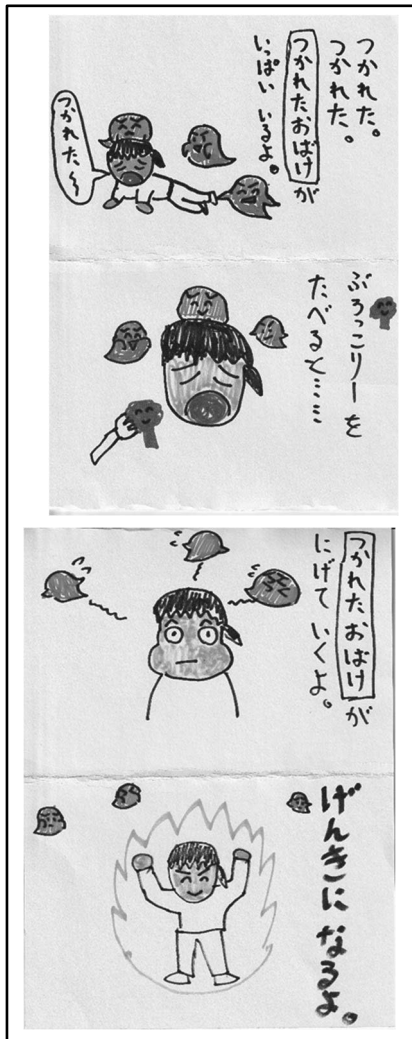


Fig. 4 ブロッコリーの紹介

給食を食べ始めるとさっそくブロッコリーを口に運び、「食べたから、おぼけをやっつける」と身振りで表す子どもがいた。また、「一緒に食べて、おぼけをやっつけよう」と友達を誘う子どももいた。

## (4) 子どもの変容

その後も、行事食や給食を食べる前日または当日に、絵による紹介をすることを続けてきた。子どもは興味をもって聞いており、実際に食べてみたり、「食べたらこうなる」という話をしたりするようになってきた。

次第に、絵の1枚目を見せてから教師がすぐに話を進めずに「食べたらどうなるかな」と投げかけると、「元気になる」「ばいきんをやっつける」「かわいくなる」など、子どもが自分から考えたことを話してくるようになってきた。

食べ慣れないものでも前向きに食べようとする子どもが増え、給食については、毎回ではないが完食する子どももみられるようになってきた。

## 3 まとめ

子ども同士でのやりとりにおいては、周りの友達を大切に思い、話をわかろうとして真剣に聞いたり、最後まで伝えようとしたりする気持ちの育ちや、共通の話題が、土台となる (Fig. 5)。



Fig. 5 やりとりの土台

行事食や給食の紹介をすることで、子どもが同じものに興味をもち、共通の知識を身につける機会を作ることができた。実際に、その興味や知識をもと

## 22 聴覚障害幼児のやりとりする力を育てる取り組み

に、「ぼくはブロッコリーを食べたから、おぼけをやっつける」「わたしも、食べてやっつける」など、必要に応じて教師も間に入りながらも子ども同士でやりとりする様子もみられた。4歳児期の子どものやりとりにおいては、「一緒にやった」という共通の経験や、「私の家にもこんなおもちゃがある」という共通の背景を土台にやりとりが行われることが多いが、今回の食育の実践もそのようなやりとりの土台作りのために役立ったと考えられる。

また、年度当初は、食べ慣れないものはほとんど口にしない子どもたちだったが、絵を見て食べ物等の効用等を知ること、食べることに前向きな気持ちになり、各々のペースで口にできるようになってきた。そして、一つ新しいものを食べられたということが自信になり、他のものも食べてみようとするなど、挑戦しようとする気持ちが芽生えてきた。それに伴い、日頃のやりとりの中でも、「最後まで伝えてみようとする」「前向きに考え、わかろうとする」といった姿がみられるようになってきた。このことから、食育を通じた気持ちの育ちが、やりとりする力の育ちにも結びついていると感じられる。

今後も給食の紹介を毎週継続し、子どもの食への意識を育てながら、子ども同士のやりとりにつなげていきたい。

### 〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

### 〔参考文献〕

農林水産省（2023）食育の推進.

<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/>

（2023年7月15日閲覧）